

「水の町」から

公益社団法人長井教育会 理事長

蒲生 直樹



〈「楽土」の風景〉

長井市は山形県の南部に位置する人口2万8000人ほどの、東北のどこにでもあのような小都市である。市の西半分ほどを、土地の者が「西山」と呼ぶ朝日連峰に連なる1000メートル程の山地(葉山断層崖)が占め、市の東部に、同じく土地の者が「東山」と呼ぶ出羽丘陵の低山帯が区切る平地、長井盆地がひらけている。

長井の地名は、すでに平安時代に見える郷名である。『和名類聚集』には、長井郷の訓(読み)に「奈加井」とあり、「ながいのごう」と読んでいることが分かる。また、「井(ゐ)」は「泉や流水から飲み水を汲み取る所。水汲み場。〔岩波古語辞典〕」であり、長井は水の集まる地を意味している。確かに、この長井の地において、朝日山系の水を集めながら西山を回り込んで東進し



宮舟場付近西山を望む

て来る置賜野川と飯豊山系に発して北上する置賜白川とが、吾妻連峰を源として東から流れて来る松川に合流、水量を増しながら最上川の本流を形成して北に向かう。長井は、正しく豊富な水の集まる地である。であればこそ、縄文の昔から、人々は野川の生み出した扇状地の微高地に集落をつくり、時代が下り治水が進むとともに、広げた「扇」の周縁部に当たる最上川の河岸段丘上に町場を形成することになったのである。

南の彼方に吾妻・飯豊の山並を望み、西山と東山との間にひらけた田野を流れる幾筋もの川。山と川に囲まれた平地に、肩を寄せ合うように慎ましやかに広がる町並み。水を集めた最上川は、やがて出羽丘陵と葉山断層崖が北に綴じ合うあたり、最上川の難所、五百川溪谷に吸い込まれて行く。この地理的な特性から見た長井市地域

を、韓国の檀国大学教授金裕赫氏は、1986年、中央大学で開催された日本地域学会において、朝鮮近世の地理学の書である『拓里志』の言う、人の住む理想の地としての「楽土」に当たるとして讃えた。地元の郷土史家によれば、『拓里志』は、楽土の条件として、次の6項目を挙げているという。

○「水口」…水の入り口部分が山や丘陵でS字の地形になり、その先に平野が広がっている。

○「野勢」…平野が広く、日照時間が長い。

○「山形」…主なる山が高く美しい。

○「土色」…土のつやが良く、砂土で固い。

○「水里」…川の合流点がある。

○「朝日朝水」…山、川の景観が美しい。なるほど、この地のお国自慢の者からすれば、どの項目をとっても我が住むふるさと、長井の風景に合致するのである。

この長井の風景を愛でた、こんな言葉がある。「西山打鼓東山舞(西山鼓を打ち東山舞う)」明治19年、長井の西山の麓の村に生まれ、一高から帝大独法科に進んだ後、日本労働法の基礎を築いた法学博士の孫田秀春(1886～1976年)日本民法を体系づけた米沢出身の文化勲章受章者、我妻栄の義兄でもある(が、郷土の子弟のために揮毫した言葉である。故郷への愛着を

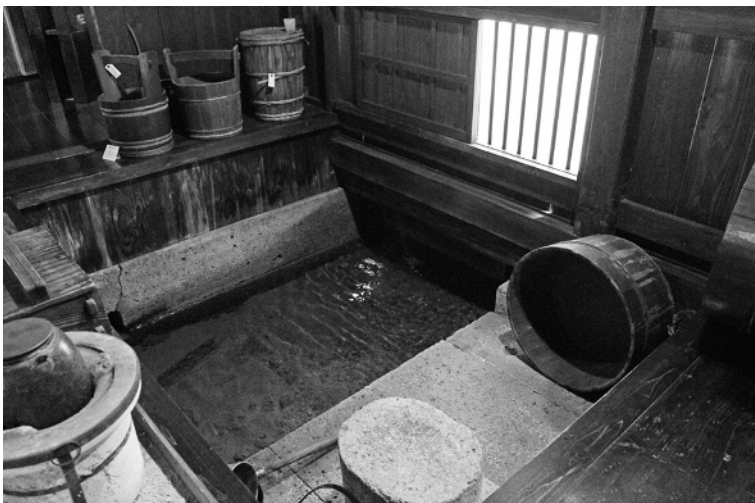
生涯語り続けた孫田は、長井の牧歌的な風景を、あたかも『万葉集』に記された古代人の「国誉め」のように、讃えたのである。そして、後日、長井を訪れ、孫田のこの言葉に感銘を受けた金裕赫氏は、孫田の言葉への讃として、対となる「南水弹琴北水笑(南水琴を弾き北水笑う)」の句を贈っている。「西山打鼓東山舞、軟水弹琴北水笑」正に楽土の風景なのである。

〈水の文化がもたらしたもの〉

古来、長井に暮らす人々の生活は、この地の豊富で良質な水に支えられてきた。町はずれの田園地帯を流れ、やがて最上川に合流する幾筋もの小河川は、田畑を潤し、良質な農作物を産み出しながら、町中に入って幾つもの水路に分かれる。町中に網目のように張り廻らされた水路は、醸造業や織物業などには産業用水を供給する水路となり、家々の排水を流しすれば、冬期には流雪溝ともなる。それぞれに様々な役割を果たしながら町場の人々の暮らしに溶け込む水路だが、ひと際、この地の人々の日々の暮らしに欠かせぬものであったことを示すのが、「かわど」と呼ばれるもの存在である。

「かわど」は、川の水を汲んだり洗い場として利用したりするために川岸から一段下げて設けられた場所で、かつての長井で

は、家のそばを流れる川のそこに見ることができた。これは、きれいな川や豊富な湧水に恵まれた土地では必ずしも珍しくはないのだが、長井では、そればかりでなく、水路を屋敷内や屋内の台所に引き込んで使っていた例も多い。その場合には、「入れかわど」と呼ばれ、大きな農家や商家などによく見られたものである。かつて最上川舟運で財をなし、江戸期以来の商家の暮らしぶりを今に伝える県指定文化財「丸大扇屋」の母屋には、その「入れかわど」が、ほぼ当時そのままの姿で残っている。



入れかわど

台所の角に、川の水を引き込むために一段低く、切り石を積んで拵えた、五尺四方の「入れかわど」。それは炊事の際に野菜を洗い、食器をすすぎ、鍋釜を磨くなど、「流し」として使ったばかりでなく、生け簀の役目も果たしている。ここでは食用の黒鯉が飼われ、食器を洗う際に出たご飯粒や食べ物の残滓がその餌になる。そして大きくなった鯉は、正月やお盆など、この地の晴れの日の貴重な御馳走になったのである。

「入れかわど」を出た水路は、床下を通り、風呂場わきに出て排水路の役割を果たし、庭の池につながっている。池にもまた、錦鯉などが育てられた。有害な科学物質などへの恐れがなかった時代の、正しく「エコな」生活形態である。

考えてみれば、川を汚さず、水を大事にしながら、連綿として川を守って暮らしを立ててきた、この地の人々の暮らしの在り様は、自ずからこの地に住む者の、他を思いやる心や慎みやかな生き方となって表れる。川の流れば、人々の生業を守り、普段の暮らしを支えるものであってみれば、上流に住む者も下流に住む者も、それぞれに互いを気づかいながら、川を大切にしない訳にはいかない。長い歴史の中で、この地にも水争いがなかった訳ではないけれども、人々は暮らしの中で、川を守る知恵を身に付け、「お互い様」と言う、互助・共

助の心を育んできた。長井には今なお、年に数回は川沿いの地区民同士が総出で行う、「川払い」と称する川掃除の風習が残るのである。

〈最上川舟運が運んだもの〉

「かつて最上川の終着港として栄えた山形、長井。300年前に旅した上方文化が辿り着いたのは、小さな山の港町でした。」2014年夏のJ R東日本「大人の休日倶楽部」のテレビCMは、吉永小百合さんの、こんな印象的な語りではじまる。

1694年(元禄7年)、米沢藩の御用商人であった京都の豪商西村久左エ門が、最上川の難所、五百川溪谷の入り口付近の黒滝(現白鷹町荒砥の下流)の岩盤を開鑿すると、最上川舟運のルートは、酒田から、180km上流の宮村(現長井市)まで到達する。これにより、領内の米や特産物の、上方や江戸への輸送手段に苦慮してきた米沢藩積年の課題が解決に至り、長井の宮村、次いで同じく長井の小出村に舟場が設置される。そして、そのことによって、もともと近隣地域の物資集積地であった長井は、米沢藩の表玄関の機能を果たすことになり、商人町として飛躍的な発展を遂げる。領内各地から集められた米や青苧(あおそ)は宮舟場から舟で酒田に送られ、北前船で京・大阪へと向かう。酒田からの帰りの舟



扇屋外観

は、北前船によって上方からもたらされた木綿・古着・小間物・荒物、赤穂の塩等を積んで来る。宮、小出の舟場におろされたこれらの物資は、長井の間屋を経て、領内各地に運ばれたのである。

宮舟場から最上川舟運を利用し、青苧や生糸を出荷する一方で上方の反物等を扱う呉服商を営み、江戸から明治へと、宮村を代表する豪商に成長した商家の一つに、先にあげた「丸大扇屋」がある。宮舟場に続く街道に面して店を構えたその建物は、幕末から明治、大正にかけての呉服商家の佇

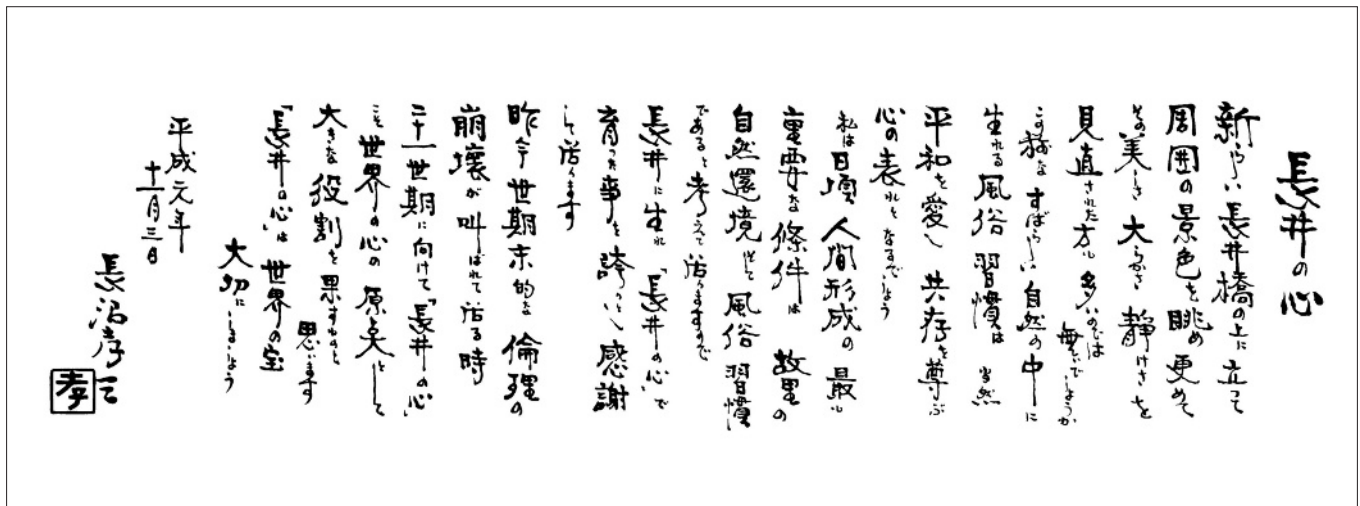


長沼孝三彫塑館前 「つり」の像

まいを今に残すとともに、庭園に立つ雲州燈籠や室内に据えられた京仏壇が、北前船を介した上方との交流の証を残している。ところで、最上川舟運がこの地にもたらしたものは、経済的な富や買い求めた物品ばかりではない。暮らしにゆとりを得た商家は、上方との文化交流を盛んに行い、自然、芸術や文化を嗜む気風を育むことになった。幕末期には、同じ藩内でも、武士の町米沢が、東北の長崎とも言われるほどの蘭学・医学の隆盛を見たのに対して、長井では、商家を中心に俳諧や川柳、絵画などの芸術・文化を愛する風土が醸成されることになったのである。

そして、この風土から生まれた芸術家の一人が、長井市の名誉市民でもある、日展参与を務めた彫刻家、長沼孝三（1908～1993年）である。「丸大扇屋」に生まれ、東京美術学校（現東京芸大）に学んだ長沼は、西洋近代の写実的な彫刻一辺倒であった当時の彫刻界に疑問を抱き、日本的なデザイン感覚に根ざす、丸みを帯びた柔らかいフォルムを追求する。長沼は言う、アルプスやヒマラヤのような峨峨たる山々や草木も疎らな荒涼たる大地を身近にして育った人間と「布団着て寝たる姿（や東山）」のように穏やかな曲線の、緑滴る野山に抱かれて育った人間とでは、自ずからその生活感情も美意識も異なるのだ、と。自らが求めた柔らかなフォルムで構成される美の原点も、慈愛や人間愛を中心テーマとした己が拠って立つ所以も、それは、長井を取り囲む山々、そのおおらかで穏やかな風景にこそあるとした長沼。その長沼が、「故郷」への想いを記した「長井の心」という書を最後に紹介し、この文章を閉じたいと思う。

今、長沼が認めたこの「長井の心」は、長井市の掲げる教育の指針となり、その彫刻は、「水と緑と花のまち」のシンボルとなつて、「丸大扇屋」の敷地内に建つ「長沼孝三彫塑館」のほか、長井市内のあちこちから故郷を見守っている。



長井の心